母親が感じる育児上の「困難」に関する研究(5)

― 2年後の追跡調査 ―

窪　　龍　子
実践女子大学人間社会学部
井　狩　芳　子
和泉短期大学児童福祉学科

Ⅰ．問題と目的

本紀要の第七集において、母親が感じる育児上の「困難」を育児上の「苦労」と表現し、子どもに関する苦労と親自身に関する苦労に分けて検証した。

その結果、「子どもに関する苦労なし群」の子どもは、早寝早起きの傾向があり、睡眠時間も充足している割合が高く、睡眠のリズムが確立しているということができた。さらに「苦労なし群」は育児で大切にする項目に対して、一昨年までは「健康であればよい」が突出していたが、前回は「自主的な意思表示」「親子の気持ちが通じ合う」「友だちと仲良くする」などの項目が、「苦労あり群」よりも数量ともに増えたのであった。これは子どもが年中組の年齢になって、社会性を育てる必要性を感じ、言葉で伝えることも可能になって、しつけを強化した結果であろうと推測された。また、しつけの必要性に対する意識は、「親自身に関する苦労あり群」に必要とする回答が多く、子どものなだめ方においても放っておく割合が高いことから、「苦労あり群」はしつけをすることが負担になっているのではないかいうことが推測された。

親自身の苦労の要因は、「自由時間がとれない」ことにあった。「苦労あり群」は、「苦労なし群」に比べて、親自身の起床時刻は早く、就寝時刻が遅い傾向があり、睡眠不足感のある回答が多く、睡眠のリズムが確立しているとは言い難かった。その原因は、平日・休日ともに家事に追われ、趣味や団らんにも時間を取っていることにあった。その結果、睡眠不足から疲労感が生じ、自由時間が十分に取れないという思いにつながっていると思われた。

今回は、2008年7月の調査開始から、2009年2月と2010年3月に引き続き、同じ対象者に4回目となる追跡調査を実施した。今回、年長児になった子どもの成長のようすや、それに伴う親の意識の変化、親の感じる苦労と睡眠時間の関係について、さらに明らかにすることを目的とした。

Ⅱ．調査の概要

１．対象園

神奈川県横浜市の住宅街にあるＮ幼稚園および茨城県下妻市にあるＴ保育園。

２．調査方法

Ｎ幼稚園およびＴ保育園の協力を得て、前回調査した同じ保護者に対し、日常の育児の状況や子どもの生活のようすについて質問紙法による調査を実施した。なお、調査で得られたデータは、本研究以外では一切使用しないことを確約した。

質問紙の内容については、本紀要第７集に発表した第４報の添付資料参照。

３．調査時期

2011 年３月。

４．回答者と回収率

質問紙の配布部数は、Ｎ幼稚園へ 120 部、Ｔ保育園へ 35 部配布。回答者数は、Ｎ幼稚園 55 名、Ｔ保育園 13 名で合計 68 名。回答者のうち、新規の回答者は、Ｎ幼稚園 27 名、Ｔ保育園１名であった。回収率はＮ幼稚園 45.8％、Ｔ保育園 37.1％であった。

Ⅲ．　調査の結果

今回の回答者 68 名のうち、前回からの継続回答者は 40 名であり、41.2％の人が新規に加わっている。従って、１年前の結果と今回の結果をそのまま比較することはできないが、大まかな変化はつかむことができると判断し、結果を示したいくつかの表には、今回の 68 名分の調査結果とともに、参考資料として１年前のデータを添付した。

１．回答者の属性

(1) 回答者の年齢と子どもの人数

表１に示したように、30 歳台が 58.8％を占めている。全体的には、１年前より 30 歳台が減

表１　回答者の年齢　　Ｎ（％）

	Ｎ幼稚園	Ｔ保育園	計	１年前（参考）
20 歳代	2（3.6）	1（7.7）	3（4.4）	5（4.9）
30 歳代	32（58.2）	8（61.5）	40（58.8）	74（71.8）
40 歳代	17（30.9）	3（23.1）	20（29.4）	21（20.4）
不明	4（7.3）	1（7.7）	5（7.4）	2（2.0）
計	55（100.0）	13（100.0）	68（100.0）	102（100.0）

り 40 歳台が増加傾向にあり、回答者の年齢がやや上がっているといえる。なお、平均年齢は１年前が 36.6 歳で、今回は 38.0 歳であった。

子どもの人数は、表２に示したとおり、「２人」という回答が 70.6％と最も多く、「１人」［３人］と続く。１年前に比べると、「１人」が減り「２人」が増えた結果となっているが、子どもの人数の平均は 2.0 人で、１年前と変わらない。

表２　子どもの人数　　N（%）

	N幼稚園	T保育園	計	１年前（参考）
１人	11（20.0）	1（7.7）	12（17.6）	21（20.6）
２人	40（72.7）	8（61.5）	48（70.6）	64（62.7）
３人	3（5.5）	2（15.4）	5（7.4）	14（13.7）
４人以上	1（1.8）	2（15.4）	3（4.4）	3（3.0）
計	55（100.0）	13（100.0）	68（100.0）	102（100.0）

(2) 家族構成と住居形態

表３と表４に示したように、家族構成は、全体で核家族が 86.8％と大多数を占め、１年前よりも 7.2 ポイント増加していた。N 幼稚園では 94.5％、T 保育園は 53.8% と、園または地域によって差がみられたのは１年前と同じであった。

住居形態は、一戸建て 58.8％、集合住宅 41.2％であり、一戸建てが１年前より 1.4 ポイント減少していた。また、一戸建ては N 幼稚園 50.9％、T 保育園 92.3％と、１年前と同様に園または地域によって差がみられた。

表３　家族構成　　N（%）

	N幼稚園	T保育園	計	１年前（参考）
核家族	52（94.5）	7（53.8）	59（86.8）	82（79.6）
拡大家族	3（5.5）	5（38.5）	8（11.8）	16（15.5）
不明	0	1（7.7）	1（1.5）	4（3.9）
計	55（100.0）	13（100.0）	68（100.0）	102（100.0）

表４　住居形態　　N（%）

	N幼稚園	T保育園	計	１年前（参考）
一戸建て	28（50.9）	12（92.3）	40（58.8）	62（60.2）
集合住宅	27（49.1）	1（7.7）	28（41.2）	40（38.8）
計	55（100.0）	13（100.0）	68（100.0）	102（100.0）

(3) 回答者の職業の有無

表５に示したように、有職者 41.2％、無職者 58.8％という割合であった。１年前と比べて、有職者が減少したのは、T 保育園の回答者が少なく、N 幼稚園の回答者が多かった結果によると思われる。

表５　回答者の職業の有無　　N（％）

	N幼稚園	T保育園	計	１年前（参考）
あり	16（29.1）	12（92.3）	28（41.2）	51（49.5）
なし	39（70.9）	1（7.7）	40（58.8）	50（48.5）
その他	0	0	0	1（1.0）
計	55（100.0）	13（100.0）	68（100.0）	102（100.0）

２．育児上の苦労と子どもの変化

(1) 子どもに関する苦労

表６に示したように、子どもに関する苦労の主な内容は「食に関すること」23.5％、「言うことをきかない」20.6％であった。さらに、全体の割合は低いものの、１年前に増えていた「アレルギー疾患などの病気」は 16.7％から 13.2％へ、「ことばや発音に関すること」は 10.8％から 4.4％へと減少していた。今回の結果は１年前と比べて、内容的には大きな変化はなく、それぞれの割合が減少していた。同時に、「特に苦労はない」という回答は 26.5％であり１年前よりも 5.9 ポイント増加していた。

表６　子どもに関する苦労（複数回答）　　N（％）

	N幼稚園	T保育園	計	１年前（参考）
食に関すること	13（23.6）	3（23.1）	16（23.5）	26（25.5）
言うことを聞かない	10（18.2）	4（30.8）	14（20.6）	26（25.5）
アレルギー疾患などの病気	6（10.9）	3（23.1）	9（13.2）	17（16.7）
感情が不安定なこと	7（12.7）	1（7.7）	8（11.8）	13（12.7）
生活リズム生活習慣の樹立	5（9.1）	2（15.4）	7（10.3）	11（10.8）
子どもの気持が分からない	6（10.9）	1（7.7）	7（10.3）	10（9.8）
落着きなく何をするか不明	3（5.5）	1（7.7）	4（5.9）	6（5.9）
日常の世話すべてが大変	2（3.6）	2（15.4）	4（5.9）	4（3.9）
ことばや発音に関すること	2（3.6）	1（7.7）	3（4.4）	11（10.8）
あそびに関すること	2（3.6）	0	2（2.9）	2（2.0）
その他	8（14.5）	1（7.7）	9（13.2）	13（12.7）
特に苦労はない	17（30.9）	1（7.7）	18（26.5）	21（20.6）
回答者数	55	13	68	102

(2) 親自身の苦労

表７に示したように、親自身の苦労の主な項目は「自由時間が取れない」36.8％、「仕事と育児の両立」30.9％、「自分の健康維持・体調不良」23.5％であり、この３大項目は３年間変わっていない。このうち、「自由時間がとれない」は１年前よりも 3.4 ポイント減少したが、「仕事と育児の両立」は 4.4 ポイント増加し、「自分の健康維持・体調不良」の数値は変わっていなかった。さらに、「経済的なこと」が 15.7％から 20.6％へ、「家事全般が煩わしい」が 9.8％から 17.6％へと増加していた。「配偶者の非協力」の割合は 10.3％で１年前とほとんど変わっていない。また、「特に苦労はない」という回答は、17.6％から 29.4％へと 11.8 ポイントも増加していた。

表７　親自身の苦労（複数回答）　　N（％）

	N幼稚園	T保育園	計	１年前（参考）
自由時間がとれない	19（34.5）	6（46.2）	25（36.8）	41（40.2）
仕事と育児の両立	12（21.8）	9（69.2）	21（30.9）	27（26.5）
自分の健康維持、体調不良	14（25.5）	2（15.4）	16（23.5）	24（23.5）
経済的なこと	10（18.2）	4（30.8）	14（20.6）	16（15.7）
家事全般が煩わしい	9（16.4）	3（23.1）	12（17.6）	10（9.8）
配偶者の非協力	6（10.9）	1（7.7）	7（10.3）	11（10.8）
世の中から取り残される	3（5.5）	1（7.7）	4（5.9）	3（2.9）
親たちの口出し	1（1.8）	2（15.4）	3（4.4）	6（5.9）
親しいママ友がいない	1（1.8）	0	1（1.5）	5（4.9）
その他	3（5.5）	1（7.7）	4（5.9）	9（8.8）
特に苦労はない	20（36.4）	0	20（29.4）	18（17.6）
回答者数	55	13	68	102

(3) 育児上の苦労への対処

育児上の苦労への対処法は、自由記述欄に 42 名（61.8％）の記載があった。その内容は、１年前は他者へ協力を求める記述が多かったが、今回は「無理をしない、ほどほどに手抜きをする、マイペースを守る」などの記述と、「休む、疲れたら寝る、定期的に運動する」などの対処法が目立った。夫への協力要請に関する記述は仕事が忙しいからという理由で減少し、無理をしないという現実的な対処法で乗り切っているようすが伺えた。

３．子どもの変化と子育ての喜び

(1) 子どもの変化

調査対象児の１年間の変化について自由記述で聞いたところ、60 名（88.2％）の記述があり、それをまとめると表８のような結果になった。子どもに関する苦労の有無や親自身に関する苦

労の有無に関係なく、「他者との関係や遊びに変化がでてきた」「食欲が出てきて丈夫になった、健康になった」「生活リズムが変わり、興味の対象が広がった」というのが主な変化である。

表８　１年間の子どもの変化（自由記述の集計・重複回答あり）　　N（%）

	子どもに関する苦労あり群	子どもに関する苦労なし群	親自身の苦労あり群	親自身の苦労なし群	計
遊びや友だちの変化	20（46.5）	6（35.3）	21（48.8）	5（29.4）	26（43.3）
健康上や食欲の変化	15（34.9）	6（35.3）	16（37.2）	5（29.4）	21（35.0）
生活リズム等の変化	9（20.9）	2（11.8）	9（20.9）	2（11.8）	11（18.3）
情緒の変化	6（13.9）	4（23.5）	6（14.0）	4（23.5）	10（16.7）
知的興味の変化	4（9.3）	3（17.6）	5（11.6）	2（11.8）	7（11.7）
その他	1（2.3）	0（－）	0（－）	1（5.9）	2（3.3）
変化なし	3（6.9）	1（5.9）	3（7.0）	1（5.9）	4（6.7）
回答者数	43（100.0）	17（100.0）	43（100.0）	17（100.0）	60（100.0）

遊びや友だちの変化は、「友だちが特別な仲良しと固定化、関係が深くなった、新しい関係を作れるようになった、約束して遊べるようになった、ルールを決めて遊べるようになった、遊ぶ時間が増えた、子どもだけで遊べるようになった、兄弟で仲良く遊べるようになった、外遊びが減った、トランプやオセロなどのゲームが増えた等」である。健康上や食欲の変化は、「食欲が出てきた、丈夫になった、病気をしなくなった、アトピーが軽くなった、体力がついた、野菜を食べるようになった、嫌いなものを少しでも食べるようになった、薄着になった等」である。

情緒の発達を示す内容は、「不安定になった」というマイナスの記述が１件あったが、それ以外は「年下の子に優しくする、感動して涙する、落ち着いた、登園を嫌がらない、恥ずかしがらずに歌う等」のプラスの記述であった。

生活リズム等の変化は、「早寝早起きになった、すぐに起床できるようになった、一人で起きおふろに入り自分から寝るようになった、睡眠時間が減った、昼寝をしなくなった、睡眠を多くとらないと持たなくなった、就寝時間が遅くなった、自分のことは自分でする、手伝いをする等」である。

知的発達を示す興味の広がりは、「興味を示す対象が増えた、文字の読み書き、ドリル、机を得て勉強に興味をもった、良くも悪くもウソがつけるようになった等」である。

これらの変化の意味するところは「子どもが成長した」ということである。

(2) 子育ての喜び

自由記述欄における「子育てでうれしいこと」には64名（94.1%）の回答があった。その内容は「できることが増えた、成長がみられる、自分からチャレンジする、手がかからなくなった等」27件、「優しい気持ちが育っている」15件、「友達と楽しそうに遊んでいる」８件と、

子どもの成長を喜ぶ記述が最も多く、次いで「ママ大好きといってくれる、その日のことを話してくれる、うれしそうな笑顔、かわいい、一緒にお風呂に入ってくれる」など密接な母子関係に関する記述が 21 件と続き、「毎日が楽しく健康であればよい」が 7 件であった。

4．しつけ

(1) しつけの必要性

表 9 および表 10 に示したように、しつけの必要性については、約 70％の親が「必要である」と回答し、１年前に比べて 10 ポイントほど多くなっている。そのうち、育児上の苦労の有無に分けて考えてみると、「子どもに関する苦労なし群」と「親自身の苦労なし群」が共に「必要である」とする割合が高く、前回と逆転していた。

表９　子どもに関する苦労の有無としつけの必要性　　N（％）

	子どもに関する苦労あり群	子どもに関する苦労なし群	計	1 年前（参考）
必要である	33（66.0）	14（77.8）	47（69.1）	64（62.7）
時と場合による	13（26.0）	4（22.2）	17（25.0）	34（33.3）
特別なことは不要	0	0	0	1（1.0）
不明	4（8.0）	0	4（5.9）	3（2.9）
計	50	18	68	102（100.0）

表 10　親自身の苦労の有無としつけの必要性　　N（％）

	親自身の苦労あり群	親自身の苦労なし群	計	1 年前（参考）
必要である	30（62.5）	18（90.0）	48（70.6）	61（59.8）
時と場合による	16（33.3）	2（10.0）	18（26.5）	33（32.3）
特別なことは不要	0	0	0	1（1.0）
不明	2（4.2）	0	2（2.9）	7（6.9）
計	48	20	68	102（100.0）

しつけを必要とする理由は、自由記述欄における 49 名（72.1％）の記述によると、次のとおりである。「しつけが必要である」という回答者は、「社会に出て困らないように、ルールを守ることは集団生活に必要、人に迷惑をかけない等」20 件、「物事の良し悪しは親が教えなければならない等」16 件、「人に対する思いやり」３件、「礼儀」２件、「基本的生活習慣作り」２件、「生活リズムを確立させる」２件、「その他」４件という内訳であった。「時と場合による」という回答者は、「他者に迷惑をかけない・傷つけない、自分がやられて嫌なことは相手にもしない」３件、「親が行動で示す」１件、「善悪の区別」１件という内訳であった。

(2) しっかりしつけること

表 11 には、子どもに関する苦労の有無別に「しっかりしつけること」の項目を示した。それらの項目のうち１年前の調査で 50％を超えていたのは、「知人に挨拶をする」71.6％、「食事中のマナー」69.6％、「家庭内で挨拶をする」59.8％、「いじわるをしない」58.8％、「歯みがきをする」58.8％であった。今回は「食事中のマナー」が 69.1％と最も多く、「歯みがきをする」66.2％、「知人に挨拶をする」64.7％、「いじわるをしない」63.9％、「就寝時間」54.4％、「家庭内で挨拶をする」52.9％であった。

子どもに関する苦労の有無別でみてみると、「苦労なし群」の方が多かったのは「食事中のマナー」72.2％、「歯みがきをする」72.2％、「知人に挨拶をする」66.7％であり、「苦労あり群」の方が多かったのは「いじわるをしない」68.0％、「就寝時間」56.0％、「家庭内で挨拶をする」54.0％であった。

表 11　子どもに関する苦労の有無としっかりしつけること（複数回答）　　N（％）

	子どもに関する苦労あり群	子どもに関する苦労なし群	計	１年前（参考）
食事中のマナー	34（68.0）	13（72.2）	47（69.1）	71（69.6）
歯みがきをする	32（64.0）	13（72.2）	45（66.2）	60（58.8）
知人に挨拶をする	32（64.0）	12（66.7）	44（64.7）	73（71.6）
いじわるをしない	34（68.0）	9（50.0）	43（63.9）	60（58.8）
就寝時間	28（56.0）	9（50.0）	37（54.4）	47（46.1）
家庭内で挨拶をする	27（54.0）	9（50.0）	36（52.9）	61（59.8）
１日３食を規則的にとる	22（44.0）	9（50.0）	31（45.6）	42（41.2）
起床時間	17（34.0）	3（16.7）	20（29.4）	27（26.5）
食事を残さない	18（36.0）	2（11.1）	20（29.4）	34（33.3）
テレビを見る時間	12（24.0）	5（27.8）	17（25.0）	16（15.7）
衣類の着脱をきちんとする	15（30.0）	1（5.6）	16（23.5）	28（27.5）
親の言うことを聞く	10（20.0）	2（11.1）	12（17.6）	22（21.6）
一緒に食事をする	9（18.0）	1（5.6）	10（14.7）	25（24.5）
食事にかける時間	6（12.0）	1（5.6）	7（10.3）	4（3.9）
登園する、休まない	6（12.0）	1（5.6）	7（10.3）	11（10.8）
勉強の習慣をつける	4（8.0）	3（16.7）	7（10.3）	11（10.8）
その他	3（6.0）	1（11.1）	4（5.9）	12（11.8）
不明	0	0	0	3（2.9）
回答者数	50	18	68	102

なお、親がしつけるより子どもの思うとおりにさせているとする項目は、「勉強の習慣をつける」42.6％、「食事に要する時間」30.9％、「テレビを見る時間」30.9％が主なものであった。

(3) 機嫌が悪いときの対処法

表12には、子どもの機嫌が悪いときの対処法について、子どもに関する苦労の有無別に示した。１年前の結果と比べて「言葉かけ、機嫌を取る」「放っておく」「気分転換を図る」が激減し、「スキンシップを図る」が47.1％で主な対処法となっていた。特に「子どもに関する苦労なし群」は61.1％とその割合が高い。今回新たに選択肢に加えた項目に「機嫌の悪いことがない」がある。その回答は全体的には16.2％であるが、「苦労なし群」は22.2％と「苦労あり群」の14.0％よりも、8.2ポイントほど多かった。

表12　子どもに関する苦労の有無と機嫌が悪い時の対処法（複数回答）　　N（％）

	子どもに関する苦労あり群	子どもに関する苦労なし群	計	１年前（参考）
言葉かけ、機嫌を取る	7（14.0）	2（11.1）	9（13.2）	45（44.1）
スキンシップを図る	21（42.0）	11（61.1）	32（47.1）	59（57.8）
放っておく	2（4.0）	0	2（2.9）	18（17.6）
気分転換を図る	3（6.0）	0	3（4.4）	12（11.8）
口で叱る	1（2.0）	0	1（1.5）	6（5.9）
叩く	0	0	0	0
その他	7（14.0）	1（5.6）	8（11.8）	4（3.9）
機嫌の悪いことなし	7（14.0）	4（22.2）	11（16.2）	＊
回答者数	50	18	68	102

注）＊１年前には調査項目なし

５．育児上で大切なこと

(1) 育児上で大切なことと子どもに関する苦労の有無の関係

表13に示したように、育児上で大切なこととする項目のうち、全体的に多かったのは「自主的な意思表示」70.6％、「生活リズムをつける」51.5％、「健康であればよい」50.0％、「友達と仲良くする」50.0％、「親子の気持ちの通じ合い」47.1％であった。

「子どもに関する苦労なし群」でも「自主的な意思表示」が66.7％と最も多く、さらに「苦労あり群」よりも多かったのは「親子の気持ちが通じ合う」61.8％と「健康であればよい」55.6％の２項目であった。「苦労あり群」の方が多かったのは「自主的な意思表示」72.0％、「友だちと仲良くする」54.0％、「生活のリズムをつける」52.0％の３項目であり、両群間で２番目以降の項目が異なる。

(2) 育児上で大切なことと親自身の苦労の有無との関係

表14に示したように、育児上で大切なこととする項目のうち、全体的に多かったのは、「自主的な意思表示」72.1％、「生活リズムをつける」54.4％、「健康であればよい」51.5％、「友達

表 13　子どもに関する苦労の有無と育児で大切なこと（複数回答）　N（%）

	子どもに関する苦労あり群	子どもに関する苦労なし群	計	１年前（参考）
自主的な意思表示	36（72.0）	12（66.7）	48（70.6）	57（55.9）
生活リズムをつける	26（52.0）	9（50.0）	35（51.5）	46（45.1）
友達と仲良くする	27（54.0）	7（38.7）	34（50.0）	53（52.0）
健康であればよい	24（48.0）	10（55.6）	34（50.0）	51（50.0）
親子の気持が通じ合う	21（42.0）	11（61.8）	32（47.1）	54（52.9）
園でうまくやってゆく	10（20.0）	4（22.2）	14（20.6）	31（30.4）
子の気持を受け止め、優先	6（12.0）	2（11.1）	8（11.8）	14（13.7）
言うことを聞く素直さ	3（6.0）	0	3（4.4）	7（6.9）
稽古で可能性を伸ばす	1（2.0）	1（5.6）	2（2.9）	6（5.9）
成長の指標に遅れない	0	1（5.6）	1（1.5）	4（3.9）
その他	1（2.0）	0	1（1.5）	3（2.9）
不明	0	0	0	2（2.0）
回答者数	50	18	68	—
１年前（参考）	81	21	—	102

表 14　親自身の苦労の有無と育児で大切なこと（複数回答）　N（%）

	親自身の苦労あり群	親自身の苦労なし群	計	１年前（参考）
自主的な意思表示	35（72.9）	14（70.0）	49（72.1）	57（55.9）
生活リズムをつける	25（52.1）	12（60.0）	37（54.4）	46（45.1）
健康であればよい	27（56.3）	8（40.0）	35（51.5）	51（50.0）
友達と仲良くする	24（50.0）	10（50.0）	34（50.0）	53（52.0）
親子の気持が通じ合う	21（43.8）	11（55.0）	32（47.1）	54（52.9）
園でうまくやってゆく	8（16.7）	6（30.0）	14（20.6）	31（30.4）
子の気持を受け止め、優先	5（10.4）	3（15.0）	8（11.8）	14（13.7）
言うことを聞く素直さ	3（6.3）	0	3（4.4）	7（6.9）
稽古で可能性を伸ばす	1（2.1）	1（5.0）	2（2.9）	6（5.9）
成長の指標に遅れない	0	1（5.0）	1（1.5）	4（3.9）
その他	1（2.1）	0	1（1.5）	3（2.9）
不明	0	0	0	2（2.0）
回答者数	48	20	68	—
１年前（参考）	84	18	—	102

と仲良くする」50.0%、「親子の気持ちの通じ合い」47.1%であった。

「親自身の苦労なし群」も「自主的な意思表示」が70.0%と最も多かったが、「苦労あり群」よりも多かったのは「生活のリズムをつける」60.0%、「親子の気持ちが通じ合う」55.0%の2項目であり、「苦労あり群」の方が多かったのは「自主的な意思表示」72.9%、「健康であればよい」56.3%の2項目であった。やはり両群間で2番目以降の項目が異なっている。

6. 子どもの睡眠時間

(1) 子どもの起床時刻

表15には、子どもに関する苦労の有無別に子どもの平日と休日の起床時刻を示した。全体的には、平日は7時台前半に起床する子どもが38.2%、休日は8時台前半に起床する子どもが30.9%と最も多く、平日は休日より早起きの傾向がみられた。「子どもに関する苦労なし群」は、休日でも平日と同じ7時台前半の起床が38.9%を占め、「苦労あり群」の最多が8時台前半の40.0%と比べて、早起きの傾向がみられた。

表15　子どもに関する苦労の有無と子どもの起床時刻　　N（%）

	子どもに関する苦労あり群	子どもに関する苦労なし群	計	1年前（参考）
5時台	0 0	0 0	0 0	0 0
6時台前半	5（10.0） 2（4.0）	3（16.7） 1（5.6）	8（11.8） 3（4.4）	7（6.9） 2（2.0）
6時台後半	17（34.0） 2（4.0）	4（22.2） 3（16.7）	21（30.9） 5（7.4）	24（23.5） 10（9.8）
7時台前半	20（40.0） 11（22.0）	6（33.3） 7（38.9）	26（38.2） 18（26.5）	43（42.2） 30（29.4）
7時台後半	2（2.0） 12（24.0）	4（22.2） 3（16.7）	6（8.8） 15（22.1）	18（17.6） 21（20.6）
8時台前半	4（8.0） 20（40.0）	1（5.6） 1（5.6）	5（7.4） 21（30.9）	9（8.8） 23（22.5）
8時台後半	0 2（4.0）	0 3（16.7）	0 5（7.4）	0 12（11.8）
9時台前半	0 1（2.0）	0 0	0 1（1.5）	0 4（3.9）
不明	2（4.0） 0	0 0	2（2.9） 0	1（1.0） 0
回答者数	50	18	68	102（100.0）

注）上段は平日、下段は休日

(2) 子どもの就寝時刻

表 16 には、子どもに関する苦労の有無別に子どもの平日と休日の就寝時刻を示した。全体的には、21 時台前半に就寝する子どもが、平日（33.8％）、休日（42.6％）ともに多く、休日は平日より遅いという傾向は１年前と変わらない。さらに、「子どもに関する苦労なし群」の平日の就寝時刻で多いのは 20 時台前半の 22.2％、「苦労あり群」で多いのは 21 時台前半 40.0％であり、「苦労なし群」の就寝時間の方がやや早い傾向がみられた。休日は、21 時台前半が「苦労なし群」38.9％、「苦労あり群」44.0％と最多であった。

表 16　子どもに関する苦労の有無と子どもの就寝時刻　　N（％）

	子どもに関する苦労あり群	子どもに関する苦労なし群	計	１年前（参考）
19 時台	2（4.0） 1（2.0）	2（11.1） 2（11.1）	4（5.9） 3（4.4）	4（3.9） 2（2.0）
20 時台前半	4（8.0） 2（4.0）	4（22.2） 1（5.6）	8（11.8） 3（4.4）	14（13.7） 0（9.8）
20 時台後半	6（12.0） 4（8.0）	3（16.7） 2（11.1）	9（13.2） 6（8.8）	18（17.6） 10（9.8）
21 時台前半	20（40.0） 22（44.0）	3（16.7） 7（38.9）	23（33.8） 29（42.6）	38（37.3） 43（42.2）
21 時台後半	7（14.0） 12（24.0）	3（16.7） 3（16.7）	10（14.7） 15（22.1）	18（17.6） 18（17.6）
22 時台前半	8（16.0） 7（14.0）	2（11.1） 2（11.1）	10（14.7） 9（13.2）	10（9.8） 12（11.8）
22 時台後半	0 0	0 1（5.6）	0 1（1.5）	0 2（2.0）
23 時台以降	1（2.0） 0	0 0	1（1.5） 0	0 5（5.0）
不明	2（4.0） 2（4.0）	1（5.6） 0	3（4.4） 2（2.9）	0 0
回答者数	50	18	68	102（100.0）

注）上段は平日、下段は休日

(3) 子どもの睡眠時間

子どもの睡眠時間の平均値は、平日 9.8 時間、休日 9.9 時間でほとんど差はなかった。この結果を１年前と比べると、平日・休日ともに、0.1 時間（６分）ほど短くなっていた。

表 17 には、子どもの平日と休日の睡眠時間と過不足感の関係を示した。子どもの睡眠時間で最も短いのは８時間台、最も長いのは 11 時間以上であり、最も多いのは 10 時間台であった。この睡眠時間が、親からみて「足りている」のは平日で 61.8％、休日で 80.9％であった。睡眠時間が８時間台であっても 11 時間以上であっても、「足りたり足りなかったり」しており、個人差があるということになる。

表 17　子どもの睡眠時間と睡眠時間の充足度　　N（%）

	足りている	足りたり足りなかったりする	不足している	不明	計	1年前（参考）
8時間台	0 1	2 0	1 1	0 0	3（4.4） 2（2.9）	4（3.9） 50（49.0）
9時間台	12 9	6 3	0 0	0 0	18（26.5） 12（17.6）	30（29.4） 22（21.6）
10時間台	22 35	10 4	1 0	0 0	33（48.5） 39（57.4）	46（45.1） 42（41.2）
11時間以上	5 4	2 3	0 0	0 0	7（10.3） 7（10.3）	16（15.7） 23（22.5）
不明	3 6	3 2	0 0	1 0	7（10.3） 8（11.8）	6（5.9） 10（9.8）
回答者数	42（61.8） 55（80.9）	23（33.8） 12（17.6）	2（2.9） 1（1.5）	1（1.5） 0	68 68	102 102

注）上段は平日、下段は休日

子どもに関する苦労の有無別に子どもの睡眠時間をみると、「苦労なし群」の睡眠時間は、10時間台が平日72.2%、休日61.1%と大多数を占めている。「苦労あり群」も10時間台が平日38.0%、休日56.0%と最多だが、８～９時間台も「苦労なし群」より多く、睡眠時間が短い傾向がみられた（表18）。さらに、子どもに関する苦労の有無別に、睡眠時間が足りているか否かをまとめたのが表19である。「苦労なし群」は「足りている」という回答が平日77.8%、休日88.9%と、ともに大多数を占め、「不足している」は皆無であった。それに対し「苦労あり群」は「足りている」とする回答が、平日54.0%、休日78.0%と最も多いものの、「不足している」という回答が、平日4.0%、休日2.0%と少数ながらみられた。

表 18　子どもに関する苦労の有無と子どもの睡眠時間　　N（%）

	子どもに関する苦労あり群	子どもに関する苦労なし群	計	1年前（参考）
8時間台	3（6.0） 2（4.0）	0 0	3（4.4） 2（2.9）	4（3.9） 5（4.9）
9時間台	16（32.0） 9（18.0）	3（16.7） 3（16.7）	19（27.9） 12（17.6）	30（29.4） 22（21.6）
10時間台	19（38.0） 28（56.0）	13（72.2） 11（61.1）	32（47.1） 39（57.4）	46（45.1） 42（41.2）
11時間台	5（10.0） 6（12.0）	2（11.1） 1（5.6）	7（10.3） 7（10.3）	15（14.7） 18（17.6）
12時間以上	0 0	0 0	0 0	1（1.0） 5（4.9）
不明	7（14.0） 5（10.0）	0 3（16.7）	7（10.3） 8（11.8）	6（5.9） 10（9.8）
計	50	18	68	102

注）上段は平日、下段は休日

表 19　子どもに関する苦労の有無と子どもの睡眠時間の充足度　　N（%）

	子どもに関する苦労あり群	子どもに関する苦労なし群	計	1年前（参考）
足りている	27（54.0） 39（78.0）	14（77.8） 16（88.9）	41（60.3） 55（80.9）	65（63.7） 77（75.5）
足りたり足りなかったりする	18（36.0） 10（20.0）	4（22.2） 2（11.1）	22（32.4） 12（17.6）	36（35.3） 24（23.5）
不足している	2（4.0） 1（2.0）	0 0	2（2.9） 1（1.5）	1（1.0） 1（1.0）
不明	3（6.0） 0	0 0	3（4.4） 0	0 0
回答者数	50	18	68	102

注）上段は平日、下段は休日

7．親の睡眠時間

(1) 親の起床時刻

表 20 には、親自身の苦労の有無別に、親の起床時刻を示した。１年前は、平日は６時台前半が 40.2％と最も多かったが、今回は５時台以前、６時台前半、６時台後半がそれぞれ 27.9％

表 20　親自身の苦労の有無と親の起床時刻　　N（%）

	親自身の苦労あり群	親自身の苦労なし群	計	1年前（参考）
5時台以前	16（33.3） 4（8.3）	3（15.0） 0	19（27.9） 4（5.9）	18（17.6） 3（2.9）
6時台前半	13（27.1） 0	6（30.0） 3（15.0）	19（27.9） 3（4.4）	41（40.2） 7（6.9）
6時台後半	10（20.8） 3（6.3）	9（45.0） 2（10.0）	19（27.9） 5（7.4）	25（24.5） 14（13.7）
7時台前半	5（10.4） 12（25.0）	2（10.0） 6（30.0）	7（10.3） 18（26.5）	14（13.7） 21（20.6）
7時台後半	2（4.2） 7（14.6）	0 2（10.0）	2（2.9） 9（13.2）	4（3.9） 19（18.6）
8時台前半	1（2.1） 11（22.9）	0 5（25.0）	1（1.5） 16（23.5）	0 25（24.5）
8時台後半	0 7（14.6）	0 2（10.0）	0 9（13.2）	0 7（6.9）
9時台前半	0 2（4.2）	0 0	0 2（2.9）	0 6（5.9）
不明	1（2.1） 2（4.2）	0 0	1（1.5） 2（2.9）	0 0
計	48	20	68	102（100.0）

注）上段は平日、下段は休日

と分散していた。１年前の休日の起床時刻は８時台前半が 24.5％で最も多かったが、今回は７時台前半が 26.5％、８時台後半が 23.5％と分かれた。

親自身の苦労の有無別で起床時刻をみてみると、「苦労なし群」の平日は６時台後半が 45.0％、休日は７時台前半が 30.0％と最も多かった。それに対し、「苦労あり群」の平日は５時台以前が 33.3％、休日は７時台前半が 25.0％と最も多かった。

(2) 親の就寝時刻

表 21 には、親自身の苦労の有無別に、親の就寝時刻を示した。平日・休日とも就寝時刻は、24 時以降の就寝が平日 35.3％、休日 33.8％と最も多く、１年前と変わらない。親自身の苦労の有無別にみると、「苦労なし群」は平日・休日とも 23 時台前半が 35.0％と最も多いが、「苦労あり群」は平日・休日とも 24 時以降が 39.6％と多かった。このように、就寝時刻は「苦労なし群」が早く、「苦労あり群」は遅いという違いがみられた。

表 21　親自身の苦労の有無と親の就寝時刻　　N（％）

	親自身の苦労 あり群	親自身の苦労 なし群	計	１年前 (参考)
21 時台前半	5（10.4） 3（6.3）	0 0	5（7.4） 3（4.4）	6（5.9） 6（5.9）
21 時台後半	2（4.2） 0	0 0	2（2.9） 0	4（3.9） 2（2.0）
22 時台前半	9（18.8） 10（20.8）	3（15.0） 5（25.0）	12（17.6） 15（22.1）	12（11.8） 18（17.6）
22 時台後半	4（8.3） 3（6.3）	2（10.0） 0	6（8.8） 3（4.4）	8（7.8） 6（5.9）
23 時台前半	8（16.7） 12（25.0）	7（35.0） 7（35.0）	15（22.1） 19（27.9）	22（21.6） 19（18.6）
23 時台後半	1（2.1） 0	3（15.0） 4（20.0）	4（5.9） 4（5.9）	10（9.8） 9（8.8）
24 時以降	19（39.6） 19（39.6）	5（25.0） 4（20.0）	24（35.3） 23（33.8）	39（38.2） 38（37.3）
不明	0 1（2.1）	0 0	0 1（1.5）	1（1.0） 4（3.9）
計	48	20	68	102

注）上段は平日、下段は休日

(3) 親の睡眠時間

親の平均睡眠時間は、平日 6.9 時間、休日 7.6 時間で 0.7 時間（42 分）の差があった。今回の結果を１年前と比べると、平日のみ 0.2 時間（12 分）ほど長くなっていた。

どのくらいの睡眠時間で「足りている」「不足している」と感じているのかについて、表 22 に示した。睡眠時間が４～５時間台で「足りている」という回答は皆無であったが、６時間台になると「足りている」平日 18.2％、休日 8.8％、「足りたり足りなかったりする」平日 34.3％、休日 26.9％、「不足している」平日 44.4％、休日 100.0％という回答に分かれた。７時

間台になると「足りている」という回答が、平日 31.8％、休日 14.7％、「足りたり足りなかったりする」平日 31.4％、休日 34.6％、「不足している」の平日 22.2％、休日 0 となり、８時台には「足りている」平日 45.5％、休日 52.9％、「足りたり足りなかったりする」平日 11.2％、休日 26.9％、「足りていない」は平日・休日とも皆無であった。つまり、睡眠時間が長くなればなるほど「足りている」という回答が多くなっていた。

表 22　親の睡眠時間と睡眠時間の充足度　　N（％）

	足りている	足りたり足りなかったりする	不足している	不明	計	1 年前（参考）
4 時間台	0 0	1 0	0 0	0 0	1（1.5） 0	2（2.0） 1（1.0）
5 時間台	0 0	5 2	2 0	0 0	7（10.3） 2（2.9）	15（14.7） 8（7.8）
6 時間台	4 3	12 7	4 1	0 0	20（29.4） 11（16.2）	31（30.4） 16（15.7）
7 時間台	7 5	11 9	2 0	0 0	20（29.4） 14（20.6））	34（33.3） 25（24.5）
8 時間台	10 18	4 7	0 0	0 1	14（20.6） 26（38.2）	13（12.7） 28（27.5）
9 時間台	1 6	2 1	1 0	0 0	4（5.9） 7（10.3）	5（4.9） 14（13.7）
10 時間以上	0 2	0 0	0 0	0 1	0 3（4.4）	2（2.0） 8（7.8）
不明	0 0	0 0	0 0	2 5	2（2.9） 5（7.4）	0 2（2.0）
回答者数	22（32.4） 34（50.0）	35（51.5） 26（38.2）	9（13.2） 1（1.5）	2（2.9） 7（10.3）	68	102

注）上段は平日、下段は休日

表 23 の親自身の苦労の有無別にみると、平日の睡眠時間は「苦労なし群」が６時間台 35.0％と最も多く、７時間台が 30.0％と、この２つの時間帯に集中していた。「苦労あり群」は７時間台が 29.2％と最も多かったが、４時間台も 2.1％、５時間台も 12.5％と、短い睡眠時間は「苦労あり群」に多かった。休日の睡眠時間は「苦労なし群」が８時間台の 40.0％と７時間台の 35.0％とで大多数を占めるのに対し、「苦労あり群」は８時間台の 37.5％が最も多いものの、少数ながら５時間台 4.2％や 10 時間台以上 6.3％があり、睡眠時間にばらつきがみられた。

このような状況で睡眠時間が足りているか否かを表 24 にまとめた。「親自身の苦労なし群」では、平日の睡眠時間は「足りている」という回答が 40.0％、「苦労あり群」で 29.2％であった。休日になると「苦労なし群」の「足りている」は 60.0％、「苦労あり群」は 50.0％であった。睡眠時間が「不足している」という回答は、「苦労なし群」は休日の 5.0％だけであるのに対し、「苦労あり群」は平日 20.8％、休日 2.1％という結果で、「苦労あり群」は睡眠不足を感じている割合が高い。この結果を１年前に比べると、「足りている」という回答が増え、「足りない」という回答が減っていた。

表 23　親自身の苦労の有無と親の睡眠時間　　N（%）

	親自身の苦労 あり群	親自身の苦労 なし群	計
4 時間台	1（2.1） 0	0 0	1（1.5） 0
5 時間台	6（12.5） 2（4.2）	1（5.0） 0	7（10.3） 2（2.9）
6 時間台	13（27.1） 9（18.8）	7（35.0） 2（10.0）	20（29.4） 11（16.2）
7 時間台	14（29.2） 7（14.6）	6（30.0） 7（35.0）	20（29.4） 14（20.6）
8 時間台	8（16.7） 18（37.5）	6（30.0） 8（40.0）	14（20.6） 26（38.2）
9 時間台	4（8.3） 5（10.4）	0 2（10.0）	4（5.9） 7（10.3）
10 時間以上	0 3（6.3）	0 0	0 3（4.4）
不明	2（4.2） 4（8.3）	0 1（5.0）	2（2.9） 5（7.4）
回答者数	48（70.6）	20（29.4）	68

注）上段は平日、下段は休日

表 24　親自身の苦労の有無と親の睡眠時間の充足度　　N（%）

	親自身の苦労 あり群	親自身の苦労 なし群	計	1 年前 (参考)
足りている	14（29.2） 24（50.0）	8（40.0） 12（60.0）	22（29.4） 36（52.9）	25（24.5） 50（49.0）
足りたり足りなかったり	24（50.0） 20（41.7）	12（60.0） 7（35.0）	36（52.9） 27（39.4）	55（53.9） 43（42.2）
不足している	10（20.8） 1（2.1）	0 1（5.0）	10（14.7） 2（2.9）	22（21.6） 9（8.8）
不明	0 3（6.3）	0 0	0 3（4.4）	0 0
回答者数	48	20	68	102（100.0）

注）上段は平日、下段は休日

親の就寝時刻が遅くなる理由について、表 25 にまとめた。平日・休日とも、全体では「家事全般」と「趣味やくつろぎ」が最も多い理由であった。親自身の苦労の有無別にみると、平日の「苦労なし群」は、「家事全般」35.0％と「趣味やくつろぎ」65.0％であるのに対して、「苦労あり群」では、それぞれの割合が 62.5％、50.0％であった。また「遅くない」とする回答が「苦労なし群」が 15.0％であったのに対し「苦労あり群」は 12.5％であった。

休日になると、全体では「趣味やくつろぎ」を理由とする回答が 52.9％となり、「家事全般」は 45.6％であった。「親自身の苦労なし群」は、「家事全般」30.0％、「趣味やくつろぎ」45.0％

であった。それに対し「苦労あり群」は、それぞれ 52.1％と 56.3％であった。また「遅くない」という回答は「苦労なし群」30.0％、「苦労なし群」14.6％という結果であった。

表 25　親自身の苦労の有無と親の就寝時刻が遅くなる理由（複数回答）　　N（％）

	親自身の苦労 あり群	親自身苦労 なし群	計	１年前 （参考）
家事全般	30（62.5） 25（52.1）	7（35.0） 6（30.0）	37（54.4） 31（45.6）	49（48.0） 34（33.3）
子どもの世話	10（20.8） 10（20.8）	1（5.0） 1（5.0）	11（16.2） 11（16.2）	20（19.6） 17（16.7）
家族の世話	2（4.2） 5（10.4）	1（5.0） 0	3（4.4） 5（7.4）	13（12.7） 7（6.9）
本人の仕事	5（10.4） 2（4.2）	0 0	5（7.4） 2（2.9）	11（10.8） 5（4.9）
趣味やくつろぎ	24（50.0） 27（56.3）	13（65.0） 9（45.0）	37（54.4） 36（52.9）	40（39.2） 46（45.1）
家族とのくつろぎ	3（6.3） 10（20.8）	2（10.0） 2（10.0）	5（7.3） 12（17.6）	13（12.7） 27（26.5）
その他	3（6.3） 1（2.1）	3（15.0） 3（15.0）	6（8.8） 4（5.9）	9（8.8） 1（1.0）
遅くない	6（12.5） 7（14.6）	3（15.0） 6（30.0）	9（13.2） 13（19.1）	17（16.7） 24（23.5）
不明	0 1（2.1）	0 0	0 1（1.5）	2（2.0） 3（2.9）
回答者数	48	20	68	102

注）上段は平日、下段は休日

８．　育児全般に関する自由記述

質問紙の最後に「子どもの生活時間、育児について、今の世の中に欠けていること、子どもの将来について心配なことなどを自由に書いてください」という自由記述欄を設けたところ、39 名（57.4％）の回答があった。

１年前の記述は、社会の仕組みや地域社会や今の社会に対しての提言が多く述べられ、また、地域や他者への注文や批判もあった。さらに子どもに対する希望、生活に関する悩みや不安も述べられていた。今回は、間近に迫っている小学校入学に対する心配や不安のほか、「早寝の習慣が良かった、もう少し早寝早起きを」という生活リズムに関する記述に加え、「子育てに追われているうちが花だと数年たって分かるようになった」「子どものおかげで世界が広がった」「子どもに感謝している、子どもを信じる」「子どもの特性を受け入れ、穏やかな気持ちで子育てをするため私の価値観を変えることが必要だった」「今は将来の宝を育てていると思って育児に専念している」など、子育ての見方に変化が生じ、心の広がりを感じる記述がみられたのが特徴的であった。

Ⅳ．　考察

１．　育児上の苦労の変化

母親が感じる育児上の苦労のうち、子どもに関する苦労の各項目に対する回答は、「食に関すること」と「言うことを聞かない」が主なものであるが、１年前の数値に比べると、「食に関すること」で 2.0 ポイント、「言うことを聞かない」で 4.9 ポイント減少し、その他の多くの項目でも減少していた。反対に「特に苦労はない」が 20.6％から 26.5％へと 5.9 ポイント増えていた。親自身の苦労の項目をみると、「自由時間がとれない」と「仕事と育児の両立」が主な項目だが、最も多い「自由時間がとれない」は、前回より 3.4 ポイント減少し、「仕事と育児の両立」は、4.4 ポイント増加していた。一方、「特に苦労はない」は、11.8 ポイントも増加していた。

以上のことから、全体的には育児上の苦労を感じる割合が減少しつつあると見ることができよう。その要因を表８に示した自由記述の回答から読み取ることができる。第一には「子どもの成長」である。子どもは６歳になって、食欲が増し健康になって病気になることが少なくなり、他者に優しい気持ちを表現するようになって友達同士で遊べるようになってきた。さらに生活のリズムも身に付き始め、いろいろなものに興味を示し、文字の読み書き、ドリルにも関心が向くようになった。このような成長の結果、言葉での意思疎通も可能になり、今までよりも手がかからなくなったことが苦労感の減少につながったと思われる。第二には、母親が家事育児に対して頑張りすぎないことも必要であると悟ったことがあげられる。育児上の苦労への対処法には、今回、無理をしない、マイペースを守る、ほどほどに手抜きをする、疲れたら寝る、運動するなどという記述が目立った。育児という長期戦には、肩の力を抜いて当たることが必要だとの認識が深まったものと思われる。第三は、育児観の変化である。それは、自由記述欄に、「子どもの特性を受け入れ、穏やかな気持ちで子育てをするためには、自分の価値観を変えることが必要だった」「子育てに追われているうちが花だと数年たって分かるようになった」「子どものおかげで世界が広がった」「子どもに感謝している、子どもを信じる」「今は将来の宝を育てていると思って育児に専念している」等とあったように、育児を義務感だけでなく、大らかな気持ちで受け入れることが苦労と感じることからの解放につながったと推測される。

２．　しつけ

しつけが必要であるという回答が 70％を占めるようになったのは、今回が初めてである。しかも、「育児上の苦労なし群」の方が「苦労あり群」よりも、その割合が高かったのである。前述のように、子どもが年長児になって成長したことを実感し、しつけの必要性と可能性を感じるようになったと思われる。

今回の調査で最も多かったしつけの項目は「食事中のマナー」である。これは、子どもに関する苦労の有無にかかわらず最も多く、１年前に最も多かった「知人に挨拶」を抜いていた。「しつけ」の必要性に関する記述に、「社会に出て困らないように、親が教えるべき」とあるように、年齢的に食事の仕方などを親が教えるべき時が来たと判断した結果であると思われる。

２番目以降は、「苦労なし群」と「苦労あり群」で項目が分かれた。「苦労なし群」は、２番目以降が「歯みがき」、「知人に挨拶」のあとに「いじわるをしない」「家庭内で挨拶」「就寝時間」「１日３食を規則的にとる」が続いた。「苦労あり群」の２番目以降は、「いじわるをしない」「歯みがき」「就寝時間」「家庭内で挨拶をする」の順であった。

これらの項目のうち、「いじわるをしない」以外は、本人に習慣づけを行う「しつけ」であるということができる。一方、「いじわるをしない」は、本人の習慣づけというよりも他者に対する気遣いである。幼児期のうちは、お互いの幼さから小さなけんかやトラブルはつきものである。そのトラブルを通して成長できるのだが、それを最初から起こさないようにという「しつけ」は、親にとっても子どもにとっても困難を伴うことが予想される。さらに「就寝時間」は「苦労なし群」がすでに１年以上も前から重視してきた「しつけ」である。

今回、「苦労なし群」が「苦労あり群」よりも「しつけ」を必要とする回答が多かったということは、子どもに日常生活に必要なマナーや生活のリズムを習慣づけていけば、その度ごとに注意をしなくても済むという点で、育児上の苦労の軽減につながることを示唆している。

子どもの機嫌が悪い時や泣き止まない時の対処法は、「スキンシップを図る」が主なものであり、「子どもに関する苦労なし群」にその割合が高かった。これは、幼児期の子どもの機嫌が悪い時には、スキンシップが最も有効であるということが経験的に分かったことであると思われる。今回初めて対処法の選択肢に「機嫌が悪いことや泣き止まないことはない」という項目を加えたのだが、この項目が選ばれたのは、「苦労なし群」22.2％、「苦労あり群」14.0％であった。「苦労なし群」の方が 8.2 ポイント高かったことから、子どもの機嫌がいつも良ければ、育児上の苦労は軽減するであろうことは推測できる。この機嫌の良さが、子どもがもつ本来の性格なのか、子育ての結果であるのかは未調査であり、今後の課題となる。

３．　育児上で大切なこと

育児上で大切なこととして最も多かった回答は「自主的な意思表示」であり 70％を越えていた。その次に「生活リズムをつける」「健康であればよい」「友だちと仲良くする」と続いた。

今回、全体的に「自主的な意思表示」が最も求められているということは、子どもが自主的に行動できるようになってほしいという願いの現れであると思われる。さらに子ども自身に「生活のリズム」が身につくことは、毎日の生活が自主的に行われるための基本である。子どもにとっても親にとっても、叱られたり叱ったりという苦労から解放される第一歩であろう。つまり、自主的な意思表示によって子どもからの主張を認め、親からもしつけをしっかりとすることで、子どもの心理的な自立が進んでいくことが、育児上の苦労の軽減につながっていると推測される。

子どもに関する苦労の有無別にみると、「苦労なし群」では「自主的な意思表示」の次に「親子の気持ちが通じ合うこと」「健康であればよい」「生活リズムをつける」と続き、「苦労あり群」は「自主的な意思表示」の次に「友だちと仲良くする」「生活リズムをつける」「健康であればよい」と続いた。親自身の苦労の有無別では、「苦労なし群」は、「自主的な意思表示」の次に「生活リズムをつける」「親子の気持ちが通じ合う」「友だちと仲良くする」と続き、「苦労あり群」は、

「自主的な意思表示」に続いて「健康であればよい」「生活リズムをつける」「友だちと仲良くする」の順であった。両群とも、それぞれの項目の順番が異なるだけで、内容的には大きな差はみられない。しかし、「子どもの関する苦労あり群」には、「友だちと仲良くする」が２番目に来ていることは、前述のように、他者に対する気遣いを優先的に求めているということができよう。また「親自身の苦労あり群」の「健康であればよい」「生活リズムをつける」は、「苦労なし群」が早くから求めていたことである。このことは、育児上の苦労を軽減させるためには何を優先すべきかを示唆している。

なお、前述のように、「子どもに関する苦労」のうち、「言うことを聞かない」が上位にあげられているが、育児上で大切なこととして「言うことを聞く素直さ」は 4.4％しか選ばれていない。この回答の矛盾は、これまでの筆者らの調査において、毎回得られてきた結果である。「言うことを聞かない」という苦労はあっても、親は子どもの「自主的な意思表示」の方を求めているということになる。

４．　親と子の睡眠時間

子どもに関する苦労の有無別にみると、「苦労なし群」の子どもの起床時刻は、平日と休日で変わらない。就寝時刻は休日にはやや遅くなっているが、子どもの睡眠時間は平日・休日とも 10 時間台が最も多かった。親が子どもの睡眠時間が足りているとみているのが平日で 77.8％、休日で 88.9％であるので、睡眠時間はほぼ確保されているとみることができる。それに対し、「苦労あり群」は、平日は早起きで、休日は遅起きの傾向があり、就寝時刻は、平日・休日とも 21 時台前半が最も多い。睡眠時間は９時間台と 10 時間台に分かれ、その充足度は、平日は 54.0％、休日は 78.0％であり、不足気味であると判断されている子どもも少なくなかった。

親の起床時刻は５時台から始まる。「親自身の苦労なし群」の平日の起床時刻で最も多いのは、６時台後半、次に６時台前半が続く。休日は、５時台は皆無になり、６時台前半から８時台後半まで広がる。「苦労なし群」の就寝時刻は、平日・休日とも 23 時前半が最も多く、時間の幅も 22 時台前半から 24 時以降の中に納まっている。睡眠時間の充足感は「足りている」が平日は 40.0％、休日は 60.0％であり、「不足している」という回答は皆無であった。

「苦労あり群」の平日の起床時間は５時台が最も多く、次に６時台前半が続き、早起きである。休日も少数ながら５時台の起床があり、最も多いのは７時台前半であった。時間の幅は、９時台前半まで広がっている。「苦労あり群」の就寝時刻は、平日･休日とも 24 時以降が最も多かった。その一方で､21 時台前半に就寝する早寝もあった。睡眠時間は５時間台から９時間台と幅が広い。充足度については、平日は「足りている」が 29.2％と少なく、「足りたり足りなかったりする」50.0％、「足りない」が 20.8％で、充足感は「苦労なし群」と比べて低いと言わざるを得ない。休日には「足りている」が 50.0％に増えているが、「苦労なし群」よりも 10 ポイント少ない。

以上をまとめてみると、「苦労あり群」は、「苦労なし群」に比べて、平日は早起きで就寝時刻は遅く、休日の遅起きで補っているようにみえるが、睡眠時間は不足気味と感じ、睡眠のリズムも確立しているとは言い難い。

親の睡眠のとり方は、子どもの睡眠のとり方に影響を及ぼしている。「苦労あり群」は親子とも睡眠のリズムが確立していない傾向がある。特に親は睡眠のリズムの乱れと短さが睡眠不足感を引き起こし、それが心身の疲労感につながり、育児の苦労ありと感じるようになっていると推測される。

「苦労あり群」の就寝時刻が遅くなるのは、平日・休日とも「家事全般」「趣味やくつろぎ」のためである。「苦労なし群」も同じ理由で遅くなっていると回答しているが、その割合は、「苦労あり群」の半分近くまで少なくなっている。

なお、「苦労あり群」において、就寝時刻は「遅くない」という回答を選んだ割合が、平日12.5％、休日14.6％もあることから、「苦労」の原因が睡眠時間の不足だけではないことを示唆している。他にどのような理由があるのかを検証することが今後の課題である。

Ⅴ．要約と今後の課題

母親が感じる育児上の苦労は、子どもに関しては「食に関すること」と「言うことを聞かない」が主なものであるが、１年前に比べると、その割合は減少し、「特に苦労はない」が増えていた。親自身の苦労は「自由時間がとれない」と「仕事と育児の両立」が主な項目だが、これらも前回より減少し、「特に苦労はない」は増加していた。この変化の要因は、第一には子どもが成長したこと、第二には母親が家事育児に対して適切な手抜きも必要であると悟ったこと、第三には、育児観の変化があげられる。

「しつけが必要である」という回答が70％を占めた。最も多かった項目は「食事中のマナー」である。「しつけ」は、「社会に出て困らないように、親が教えるべき」と記述され、年齢的に食事のマナーを親が教えるべき時が来たと判断された結果と思われる。２番目以降の項目は、「苦労なし群」は、「歯みがき」「知人に挨拶」が続いた。「苦労あり群」は、「いじわるをしない」「歯みがき」「知人に挨拶」の順番であった。これらのほとんどの項目は、本人に習慣づけを行う「しつけ」であるが、「いじわるをしない」は、他者に対する気遣いである。その「しつけ」は、親にとって「苦労」を伴うことが予想される。

育児上で大切なことで最も多かった回答は「自主的な意思表示」であり70％を越えていた。その後に、「生活リズムをつける」「友だちと仲良くする」「健康であればよい」と続き、「子どもに関する苦労あり群」では、「友だちと仲良くする」が２番目に来ていた。これは、前述のように、他者に対する気遣いを優先的に求めている結果であるといえよう。

「子どもに関する苦労」では、「言うことを聞かない」が上位であっても、育児上で大切なこととして「言うことを聞く素直さ」を選ぶ回答はわずかであった。これまでの筆者らの調査結果と同様、親は、子どもに素直さよりも自主的な意思表示を求めているのである。

子どもの睡眠時間について、「子どもに関する苦労なし群」の子どもは、平日・休日とも10時間台が最も多く、睡眠時間はほぼ確保されていた。「苦労あり群」は、平日は早起きで、休日は遅起きの傾向があり、睡眠時間は９時間台と10時間台に分かれ、その充足度は、「苦労なし群」

よりも少ない。親の睡眠時間について、「親自身の苦労あり群」は、「苦労なし群」に比べて、平日は早起きで就寝時刻は遅く、休日の遅起きで補っているようにみえるが、睡眠時間は不足気味で、睡眠のリズムも確立しているとは言い難い。親の睡眠のとり方は、子どもの睡眠のとり方に影響を及ぼし、「苦労あり群」は、親子とも睡眠のリズムが確立している割合が少ないといえよう。親の睡眠不足感は、心身の疲労感につながり、育児の苦労ありと感じるようになっていると推測される。

今後の課題として、二つの課題が示された。一つ目は「子どもの機嫌の良さ」と育児上の苦労の有無の関係である。二つ目は、育児上の苦労の有無と睡眠時間以外の要因の関係である。

なお、今回の調査で、年少児から年長児になるまで、３年間の継続調査が終了した。次回は、継続して回答のあった事例について、その変化のようすを検証していく予定である。

引用・参考文献

窪龍子・井狩芳子・野田耕、2005「幼児の心身の健康に関する研究――幼稚園児と保育園児の遊びの調査(1)」『実践女子大学人間社会学部紀要第一集』

窪龍子・井狩芳子・野田耕、2006「幼児の心身の健康に関する研究――幼稚園児と保育園児の遊びの調査(2)」『実践女子大学人間社会学部紀要第二集』

窪龍子・井狩芳子・野田耕、2007「幼児期の生活と遊びに関する研究――幼稚園児の降園後の遊びから「三間がない現象」について―」『実践女子大学人間社会学部紀要第三集』

窪龍子・井狩芳子、2008「母親が感じる育児上の「困難」に関する研究(1)――幼稚園と保育園における調査から―」『実践女子大学人間社会学部紀要第四集』

窪龍子・井狩芳子、2009「母親が感じる育児上の「困難」に関する研究(2)――幼稚園と保育園における３歳児の母親の調査から―」『実践女子大学人間社会学部紀要第五集』

窪龍子・井狩芳子、2010「母親が感じる育児上の「困難」に関する研究(3)――幼半年後の追跡調査―」『実践女子大学人間社会学部紀要第六集』

窪龍子・井狩芳子、2011「母親が感じる育児上の「困難」に関する研究(4)――幼半年後の追跡調査―」『実践女子大学人間社会学部紀要第七集』

鯨岡峻　2002　『育てられる者から育てる者へ』ＮＨＫブックス 938　日本放送協会

付記：今回の調査にご協力くださったＮ幼稚園とＴ保育園の関係各位と保護者の方々に心よりの謝意を表します。